

Title	デザイン論の難渋さ
Author(s)	河本, 郭夫
Citation	デザイン理論. 20 P.1-P.1
Issue Date	1981-11
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52681
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

デザイン論の難渋さ

河本 敦 夫

学会が創立二十周年を迎えた時には、「デザイン理論」は既に第17号を出版していた。

この歩みを振り返ると、実にその「理論」の名称にひとしき深さへ、広さへと、またこの学会特有の柔軟さをもつことへと、努力しつづけて来たことが、まざまざと目に見える思いがする。

まさに、今や1981・20号であるが、通常の学会誌とは違った、はなやぎとインテリジェンスへの努力も、この間に見捨てられずに来たように思われる。

最初の発刊に際して、井島会長が掲げられたプログラムの述べ方は、「機関誌発刊に寄せて」というのであった。心ある人には、その意が分ったはずである。つまり、当時のデザインと称したもの、或はデザイナーその人々、更には、昔の新婦朝者の如く迎えられた社員等々——そうした情況を知った上での会長の表現であることが、感受されたことであろう。私は、今でもそう思うのであるが、この大きく掲げられたプログラムの下には、「—現代デザインの地盤—」と一行小さく付記されているのである。「デザイン理論」の論表誌であることを、明々白々にするのは、この情況の際、子供じみたあせりとでも、会長は感じられたのかと、勘ぐるのは、いけない推察かも知れない。

しかし、今日、二十年20号を迎えて、畏敬すべき井島会長が、早くも「デザイン論」の在り方の難渋さに行きつかれていたことを、思わざるを得ない。そして、未だにこれを乗り越える時代は来ていない。上記の私の勘ぐりは、必ずしも役立たぬことでは、なかったらうと思う。